

三一七の里帰り その2外伝1

Charley

ガーデンに帰着したのは、もう、夜も遅い時間。

部屋の前までは、せとか先輩に送って頂いた。

あ、もちろん、名残惜しかったから、って言うのもあるけれど、それとは別に理由が.....

※ ※ ※

寮室のドアのところの名前を、何度か確かめて、わたしはそーっとドアをあける。

がちやり、と、思った以上音がしたけれど、入らないわけにもいかないので、細くあけたドアの隙間から、部屋の様子を窺う。

.....よく見えない。

仕方ないので、いまさらながら、そーっとドアを開いて、中へと入る。

そこには、後ろ手のびわ子ちゃん。やっぱりちょっと不機嫌そう。

わたしは、機先を制するように、頭を下げて、あやまる。

「ごめ.....っ」

脛に加えられた衝撃に、蹲る。

「そ、それ、わたしの麵棒.....」

「遅れるなら遅れるって連絡もできないの、この駄犬！」

さらに追い打ちで、ローキック。

びわ子ちゃんがなにか言う前に、あやまっちゃおう作戦、失敗.....

それでも、なんとか言葉を絞り出す。

「わたしの分まで、引っ越しの荷物運びさせちゃって、本当ゴメン！」

そう、百合ヶ丘は、進級をすると、寮も、希望をすれば、新館より広くて快適な旧館への部屋替えが認められる。

その手続きは、なんだか積極的にびわ子ちゃんが、すすめてくれた。

たしかに、広くて快適なお部屋になる方がいいけれど、あそこだって、思い出がつまってるお部屋だから、わたしは無理にはって思ってたんだけど。

で、帰省が長引いたものだから、新寮室への荷物運びと、旧寮室の退去に、間に合わなくなってしまったのです。

せとか先輩に部屋まで送って頂いたのも、そもそもどのお部屋に決まったのか、すら知らなかったから。

ちなみに、わたしの荷物は、全部びわ子ちゃんが運んでくれたことを、せとか先輩から聞いている。あの子、手伝わせてくれなかったのよ、って、なんかちょっと不満そうに。でも、本当かなあ。

「あ、うう、そ、そうよ、大変だったんだから！」

なぜか言葉を詰まらせながら、びわ子ちゃんが、言う。

「でも、このお部屋に、びわ子ちゃんのルームメイトとして、わたし以外の人がいなくてよかったよ」
そんなわたしを見て、ちょっとふいをつかれたような顔をする。わたしを追い出すという、その手があったか、ってところかな？

そして、気を取り直したように、わたしに詰め寄る。

「三一七、あなた、ガーデンに提出したルートで帰省しなかったでしょう！」

黙ってればわからないこと。なんでびわ子ちゃんが知ってるんだろう？

「奥多摩から甲州に抜ける道には、山賊が出る、と聞きました」

そんなことまで知ってるんだ？

わたしは言い訳をする。

「ほ、ほら、特攻服を着て、CHARMを振り回して、ハッハー、って言いながらバイクを走らせた
ら、何も出なかったよ！」

あ、びわ子ちゃんが深くため息をついた。そして、あきらめた目で、こちらを見る。

これは……わたしが本当にそうしたと思ってる目だ。

※ ※ ※

嘘である。

山賊は、いた。

尤も、身ぐるみ剥ぐ、というよりは、通行料をせしめている位なものなのだろう。

だろう、というのは、実際には、なにもされなかったからだ。

ここで効いたのは、特攻服よりも、むしろその下に着ていた、百合ヶ丘の制服の方だ。さすがに百合ヶ丘のリリィと、ことを構えるのは分が悪いと思ったのだろう。ましてや、用心棒の先生とは知り合い、ともなれば、ちょっと対抗できないと踏んだのだろう。

そう、その山賊の用心棒が、甲斐聖山時代の同級生、だったからだ。リリィ崩れ。どのようなしがらみかは、わからないけれど、彼女はここで、山賊の用心棒をしていた。

そりゃあ、こんな陥落地域で山賊をしようということになれば、ヒュージ対策をしていないわけが、ない。むしろ東京へのヒュージの侵攻を押さえる役にも立ってるのかもしれない。

彼女にはこっそり、「何かあったら、国境(くにざかい)を超えて、わたしの名前を出して、桐加賀隊に助けを求めてもいいから。」と、告げてきた。

※ ※ ※

その後は、いつものびわ子ちゃんだった。わたしの荷物の場所を教えてくれたあと、あなたはこっち、と、一方のベッドを示すと、もう一つのベッドにもぐりこんでしまった。

うん、わたしも、お風呂に入って、寝よう。うちの温泉もいいけれど、百合ヶ丘のお風呂も、広くて気持ちいいよね。あ、もしかしたら、せとか先輩もいるかも！

END

2024/04/05 v0.1 初版